

大内谷の汐酌み

松江市西川津町大内谷
足立 忠

私たちの大内谷地区は、昭和五十年代から宅地開発等により戸数が次第に増加し、現在は九十戸。昭和四十年代までの戸数は四十数戸、当時は三方を山で囲まれた小集落で、集落の中ほどにある住吉神社、薬師堂、荒神、多賀備中守の墓と伝わる五輪の塔があり、永く住民のシンボリックな存在として崇められてきた。その信仰心と相互の絆が深いことから、伝統的な行事が少しずつ形を変えながら今も継承されており、その一つに汐酌みがある。

この汐酌みは、古老の話では、約三百年前から行われているという事であり、町内では、大切にしている行事の一つである。

町内で、海水を酌んで清める習わしは、「汐かき」と「汐酌み」の二通りがある。「汐かき」は、家族や親せきに不幸があった場合、その忌明けの行事として行われ、「汐酌み」は、神事のための清めの行事とされている。

汐酌みには、春の汐酌みと秋の汐酌みがあり、春は三月二十八日、秋は九月二十五日と日にちが定められており、この日は、各戸から出雲七浦の汐酌みに出かけている。汐酌みの用具は、海水を入れる竹筒(径三センチ長さ三センチ程度の真竹)と海面に竹筒を投入するときの縄を二尋、そして、浦の神に供える白米を一握りほど中折紙に包み、準備する。出雲七浦とは、古浦、津、大芦、加賀の浦で、春は上り汐といつてこの順に浦々を巡り、秋は下り汐といつて順路が逆になって、加賀を一番目とし、以下、古浦で終わることになった。

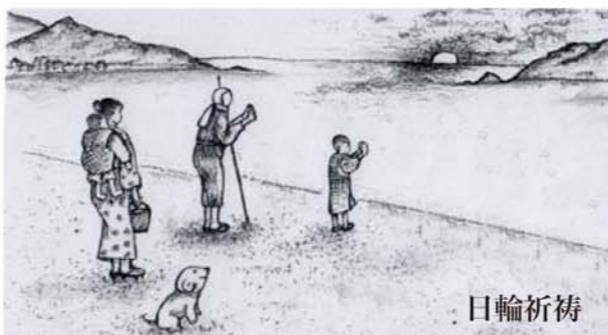


足立氏宅井戸端の竹筒

ている。この浦々では、浦の神に白米を供え、手を合わせ、家内安全や町内の安全を祈願して汐を酌むが、手結の浦では塩草と称する海藻を採って竹筒につけて帰路につく。大内谷に帰ると氏神(住吉神社)薬師堂と荒神にお参りしそれぞれ塩草に竹筒の汐水をかけて清め、その塩草をお供えして帰宅する。家では、玄関口、神棚と井戸を同様に祓い清め、その竹筒と塩草は、井戸の近くの立木の枝につるして保存している。

悠久の刻が流れる

原 美代子



母が九十歳で亡くなった夜、私は夢を見た。母は私を「四十二浦巡りに誘った。古来から夕日を饒け鎮める霊域、更に幸運恵めるぐみの神として崇拝されていた日御崎神社からの旅立ちであった。沈む夕日に白雲が朱色に染まる。夢は一瞬。母の姿が波間に消えた。母との永遠の別れであった。目が覚めた私の胸の中に、巡礼をしようという強い思いが湧き上がった。

古くから島根半島に伝えられてきた四十二浦。汐汲みをはじめながら巡礼をし、小説『万葉花旅日記』を書き始めた。母の化身ウメと影の私の物語である。私は気づいた。亡き母への思いを込めた小説はいつか出来上がる。巡礼者に浦と神社への順路が分かるものが必要だと感じ、イラストなどを交えたマップ

(研究会座長)

現地講座「雲津の伝説・祭礼」レポート

この二月十九日に、雲津浦の美保関福浦公民館雲津分館で、雲津浦・諏訪神社に関する祭礼・伝説行事を研究するため、関和彦座長・大谷めぐみ副座長を中心として、雲津地区の神社関係の方々、郷土史に造詣の深い村の古老に参加頂き、研究会メンバーを入れておよそ二十人の参加で「現地講座」を開催しました。

「日御崎神社」と名付けられた社に心惹かれた。島根半島の海沿いには、松江市美保関町笠浦、島根町野波、瀬崎、鹿島町佐陀本郷、出雲市野郷町伊野、大社町日御崎に六つの社がある。祭神は、瀬崎の都久津美神を除き多く祀られているのは、天照大神と素戔嗚尊である。



諏訪神社裏の崖から、雲津の外港を説明する 枡岡公民館長(当時)

また、信仰的行事として、親しい人が亡くなったあくる日に、岬の先端にある穴観音さんに、冥福を祈って札打ちをするという習俗があり、今の海岸沿いの海端を通る道が崩れたため諏訪神社北側海岸の岩・六地藏に「南無阿弥陀仏」の札張りをします。

(事務局)

イザナミの墓に詣で

関 和彦

享保年間(一七一七)に編纂された『雲陽誌』の佐陀大社(佐太神社)の頭に三笠山の「葉木一本(はぎのひともと)」と呼ばれた古椿がみえる。それについて歌人の釣月(ちようげつ・江戸中期の歌人)が「秋津洲生ます神の三笠山あめのした人あふかさらめや」と詠っている。神社ではそこを「イザナミの墓」、すなわち万物の母、「母来の人本」とし、重要な聖地としている。

ところが明和七年、出雲大社の千家俊信のもとに鳥取から旅立った国学者の衣川長秋は途中、佐太神社を訪れ、世人が同所を比婆山からイザナミを移し祭ったとしているのは「誤り」と断言している。確かに神話ではイザナミ命を葬った比婆山は出雲と伯耆の境であり、その後イザナミ命の遺体を移したという話のみえない。そういう意味で衣川の見解は正しいであろう。しかし、地域の人々が佐太神社の三笠山の葉木一本をイザナミ命の墓としていることは歴史的事実なのである。歴史学はそういう地域の人々の考えを今まで見捨ててきたが、それは、真の歴史学の姿ではないのである。そろそろその非を認め、さらに豊かな歴史を描くことが肝要であろう。何故、イザナミ命の墓の象徴が椿なのか気になる。「つばき」は「つはく」に通じ、妊娠の症状であり、生成の象徴であった。



イザナミの墓(佐太神社)